



## 無痛分娩を安全に行う為に

近年、硬膜外麻酔による無痛分娩におけるトラブルが報道され、無痛分娩を検討されている方にとってはご心配なことと思います。

そこで、どのようなことがどれくらいの頻度で問題となっているのか？さらには、その対応策についてお伝えしたいと思います。

日本では、現在無痛分娩の頻度は経膈分娩の 6%程度となっていますが、地域による違いも大きく、関西では 3%程度ではないかと思われます。つまり、日本では海外に比較してまだまだ少ないものの、年間出生数を 100 万人とすると、約 3-6 万人が年間無痛分娩でお産をされているということになります。2017 年度はマスコミに取り上げられる機会が多く、無痛分娩で 14 名が亡くなられたと見間違う報道もありました。正しくは、分娩によって不幸にも亡くなられた方の中で、14 名に無痛分娩が行われていたという事でした。この中で、麻酔が原因と思われる異常があったのは 4 例でした。これらはいずれも全脊髄麻酔による呼吸異常でした。硬膜外麻酔が効果を期待する部分にだけ麻酔薬を拡げて効果を発揮するのに対して、脊髄麻酔は麻酔薬の拡がった部位より下肢にかけて全体に麻酔の効果ができる違いがあります。これが広範囲になると、脊髄全体に麻酔の効果の広がり（これを全脊髄麻酔といいます）呼吸困難となる場合があるのです。硬膜外麻酔は薬を入れるためのチューブを背中に留意しますが、そのチューブが正確な位置に挿入されていないと脊髄麻酔として麻酔薬が効いてしまう場合があるのです。これを避けるために、テストのお薬を入れたり、血圧や経皮酸素濃度を測定したり、麻酔の効き方などの変化に注意したりする必要があります。しかし、もし全脊髄麻酔の状態となっても、十分な呼吸管理がなされれば数時間で回復します。今回のトラブルはこの回復処置がうまくいかなかったものと思われます。

これ以外にも、硬膜外麻酔に用いるお薬にはアレルギー症状を起こす麻酔中毒という副作用があります。これにも、症状などの変化に留意し早急に対応する必要があります。

当院では、これらの安全対策をとれるように常に準備をとっており、緊急時に備える体制を整えております。状態によっては、連携病院としっかり連携をとり対応して参ります。

当院では、2017 年末までに約 450 例の無痛分娩、また硬膜外麻酔は帝王切開手術にも全例用いており約 750 例の実績がございます。

これまで、皆様に無事ご出産いただいておりますが、これからもよりいっそうの安全と麻酔によるメリットを提供出来るよう努めてまいります。どうぞ宜しくお願いいたします。

2017.11 たかせ産婦人科 院長

